

# 人生80年型社会懇談会中間報告

昭和60年12月

人生80年型社会懇談会

## 序 論

いまや人生80年型社会が出現し始めている。これは文明史的に見て画期的な現象である。

世界のすべての文明において、人間社会の編成原理は、2000年来、人はほぼ60歳位で死ぬ、それ以上の年寄りが増えることはない、ということを前提としていた。したがって、家庭内の秩序も三世代が限界であった。ところが、今日、人生80年時代の到来により、全体としての世代構成の枠組みが大きく変容し始めているのである。

一方、日本では、1960年を転換点として、社会の構造的変化が始まっている。明治以降、武家社会の規範が国民全体に普遍化していく現象が進行した近代日本においては、国家が主導権をもって国民にその規範を与え、教育の普及等により国民社会、国民文化の形成に努力し、成功した。しかし、1960年以降、その規範から落ちこぼれていた本音の部分が顕在化してきたのである。いわば国民社会から大衆社会への変化が生じたのである。この結果、価値観の多様化・多元化、拡散化が生じている。

現状では、この新たな状況に対応した社会のシステムの適応・自己変革が十全になされるに至っておらず、現在は新たなステージへの過渡期と位置づけられる。したがって、現在の社会の編成原理は、否応なく再編成されざるを得ないのである。われわれは、いわば人類史の中で、この問題に初めて直面し、その解決を迫られているのである。

昨日まで、当然のこととしてきた価値観その他の社会のさまざまな前提がゆらぐとき、われわれは往々にして、前途に不安を抱き、ともすれば、変容する社会の潮流に棹さず意気をうしないがちであるが、人生80年の長寿を実りあるものとするか否かは、まさに国民各層の対応如何によるのである。

この過渡期や来るべき人生80年型社会を、何か暗いものと考えたことはない。人間社会は過去の歴史を振り返ると明らかなように、幾多の試練に遭遇しながら断絶することなくこれら乗り越え、社会の編成原理を巧みに変容させて今日に至っているのである。

幸いにして、近代日本文明は、明治維新以前から一貫して上昇一路にある。そして1億2千

万人の日本人のもっている活力は、いまだ全く衰えを見せていない。むしろ、これまで国民文化の規範に抑圧されていた日本人の独創性や活力が解放され初めるとともに、高齢者の増加に伴い、社会の知的集積が急速に進行しつつあるのである。したがって、人生80年型社会が本格的に到来する21世紀についても、われわれは、われわれ自身の持つ適応力を信頼し、着実に前進することが肝要である。

当懇談会は、去る2月26日より人生80年時代の生活、社会の変化及び社会システムの在り方等について、さまざまな角度から検討を加えてきた。この問題はきわめて広範囲にわたる複雑なものであり、その結論を得るには、未だ日暮れて道遠しの感がある。まだ、議論されていない事項や、さらに議論を深めるべき点も多いが、とりあえず中間的にこれまでの懇談の結果の集約として意見のとりまとめを行い、懇談状況について報告を行うこととした。

## ．安全のための考え方

人生80年時代においては、高齢者が社会の中で大きな比重を占めるようになる。今後は、高齢者が社会の主役の一人として安全で快適に生活できる客観的条件の整備を図っていく必要がある。

### (1) 科学技術の進歩

科学技術の将来を予測するのは至難の業であるが、21世紀へ向けて科学技術は急速に進歩していくものと思われる。

科学技術は、公平性を確保する方向へ発達

していく。すなわち、一つの技術が普及すると、それでメリットを受ける人とそうでない人が出てくるが、しばらくすると、デメリットを受けている人を救い、公平性を保つための次の技術が現れてくるのである。例えば、最も新しい技術の一つにコンピューター・ソフトウェアの技術がある。このソフトウェアの開発は、20歳代でなくてはできないというのが一つの常識となっている。中高年は簡単な記憶が不得手なので、ソフトウェア開発に向かないとされているのであるが、中高年の思考力は非常に安定しており、全体的な見通しや判断は鈍っていないことが多い。コンピューターが持っている記憶能力で中高年の能力を補完すれば、優秀なソフトウェアが作れる可能性がある。中高年にソフトウェア開発ができないのは、むしろ技術の方に欠陥があって中高年の能力を活用できないのだという発想が、最近出てきているのである。

科学技術の進歩は、本来、弱い人の能力を補い公平性を確保するのに大きな力がある。例えば、自動車の普及は、早く遠くまで行く能力について高齢者でも子供でもオリンピック選手でも同じ条件にしてしまった。自動式カメラの出現は、アマチュアとプロの差を縮めた。エレベーターのお陰で、若者も高齢者も何十階へでも上げられるのである。今後とも、そうした方向への技術開発に一層努めていくべきである。

しかしながら、いつの時代でも、技術の進歩と、どうにか技術に追いついていく人達の間格差は消えず、落ちこぼれる人をつくっていくことも事実である。科学技術の進歩の

こうしたマイナス面にも常に眼を向けていく必要がある。例えば、現在では、様々な情報機器の普及によって、遠く離れた外国の出来事や様々な娯楽が家庭内のスクリーンやスピーカーに中断なく届けられている。もはやテレビは生活の一部となっている。ところが、多くの高齢者は、感覚機能の衰えにより、スクリーンやスピーカーの情報から遮断され、疎外されている。今後は医学と工学の両面において感覚機能回復の努力がなされなければならない。

## (2) 生活環境の整備

今後は、科学技術を応用し、増加していく高齢者にとって暮らしやすい安全な生活環境、都市環境を作っていく必要がある。例えば、建物をつくる際には、床に段差を作らない、台所、トイレの照明を明るくする、階段には手すりを付ける等の配慮をすべきである。あるいは、高齢者の利用する施設をつくる際には、単に施設内の構造、器具等に配慮するのみでなく、施設に至るまでの交通機関、道路等まで含めて、都市構造全体の安全性、使いやすさを考えていく必要がある。

こうした広い意味での福祉施策には、能動的な面がある。眼鏡なしでは新聞も読めず、字も書けないが、眼鏡があるお蔭で社会で活躍できるという人は多い。眼鏡は個人のものだが、それを社会的な規模で行うのが福祉ともいえる。例えば、車椅子に乗っていても自由に都市の中を通行できるようになれば、それによって、現在のところ、家の中でじっとしていなければならない高齢者等の知的な、肉体的な、あるいは特殊な技術的能力を有効

に使うことができ、今まで生産的な分野から除外されていた人々の様々な能力を社会の生産的な部分に活用することができるようになる。

## (3) 人生80年型社会の「ものさし」

人生80年型社会においては、若者中心にものごとを考える基準を見直し、少し緩やかなものに変えていくが必要である。例えば、15歳のときに100mを走るのに18秒かかるのは遅い方でも、65歳以上の場合なら速い方である。あるいは、医学上の検査においても高齢者に若者の診断基準を当てはめれば、大部分の人が病気だということになってしまう。若者中心の診断基準で高齢者を病気だと診断し、社会生活を制限すれば、不幸な高齢者が増すばかりである。

健康についての考え方も変えていく必要がある。例えば、高齢になれば白髪になるが、白髪を病気と考える必要はない。動脈硬化があっても、あるいは、その他の血圧の異常や関節の異常があっても、特別な医療は必要とせず、生活上の世話や看護婦による看護上の技術援助で解決するものが多い。身体のどこかに具合の悪いところを持ちながらも相当な社会生活ができるケースは多い。高齢者が上手に身体と頭脳を使えるような環境を社会に作っていくことが重要である。

また一方、これまで医学はそれが損なわれると命がなくなる臓器、例えば心臓や肺などを中心に展開してきた。しかし、今後は寿命の伸びた、命のある人に充実した人生をもたらすための医学へと方向転換していく必要が

ある。いわばキュアからケアへの発想の転換である。

### ・安心のための仕組み

人生80年時代においては、従来の社会システムの基本的見直しが必要となってくる。人が二人いれば、社会が始まるといわれるが、社会システムは、社会、地域、家庭等において重層的に築かれている。これらのそれぞれにおいて、変化の動向を見通し、高齢者が安心して充実した高齢期を過ごすことができるよう、的確に対応していくことが肝要である。

#### (1) 仕事

人生80年型社会に向けて、従来の企業社会制度を支えていた社会経済諸条件が変化しつつある。とりわけ、人口構造の高齢化は、大きな影響を与えている。高齢者と、一口に言っても千差万別であり、その能力と体力に合わせ就労を希望することも多い。また一方、仮に高齢者を全て被扶養人口と考えるならば、若者世代は、これを支えていくために相当の負担をしていかねばならない。ところが、従来の大企業を中心とした我が国の雇用制度は、若者世代を最大限に活用する仕組みがとられており、現状では高齢者の雇用には限界がある。こうした現在の仕組みを継続することは、若者にとっても高齢者にとっても問題となると思われる。

今後は、企業社会制度の構造変化がさらに進み、職業生涯が複線化、多様化し、多くの人は長くなった職業生涯のうちに勤め先や職場を変わり、異なる仕事に取り組まなければ

ならなくなることが予測される。もちろん、こうしたことが社会にも個人にも円滑に受容されるためには、いくつかの課題を解決させていかねばならない。例えば、転職を円滑にするためには、個人にとっては自らの能力を維持向上させるための投資が必要となるが、逆に企業にとっては、雇用者へのこうした投資誘因が低下する。また、能力といっても多様であり、体力を含め老い方はさらに多様であり、一律の定年延長が全てを解決するとは限らない。

具体的には、今後さらに立ち入った分析と吟味が必要であるが、年功序列型賃金から能率給型賃金への変更、一般職から専門的な機能に応じた昇進システムを導入するなどの企業システムの変更とともに、以下のような方策が検討に値するであろう。

まず、個人の資質向上のためには時間が必要であるが、労働時間の思いきった短縮、有給教育訓練休暇などを本当に活用できる環境づくりが必要である。例えば、学者の中には若い時代につかんだテーマを終生離さない者もいるが、優秀な学者は次々と新たなテーマに取り組み、年代によってテーマを変えていく。これが可能である理由の一つは、長期の研究休暇を持てることにあり、こうしたことも参考としていく必要がある。

また、個人の資質向上のためには資金が必要であるが、例えば個人教育投資に要する諸経費のうち一定額を超える部分については、課税対象所得から控除するというように個人の教育投資負担を軽減することを考慮することが必要となる。

いずれにせよ、今後は、労働時間、余暇時間さらには資質向上のための教育を受ける時

間がそれぞれ特定の年齢層に偏在する社会システムを改めていく必要がある。

また、近年女性が企業社会へ進出しつつあるが、就労形態の多様化は女性の就労を容易にしていくと考えられる。女性が、従来から自営業のマネージャーたる「おかみさん」として社会を支えてきたということは、ともすれば看過されがちであるが、こうした経験の蓄積を適切に活用するならば、今後さらに女性の実質的な社会進出がなされていくと考えられる。

欧米では、仕事はLaborとWorkに区別される。Laborはパンのためにする肉体的精神的苦痛を意味し、Workは、肉体的苦痛はあるが、精神的喜びがある仕事を意味する。日本の場合、その区別が曖昧で、仕事は人生そのもの、人生の内容と考える傾向が強いが、最近、仕事優先から、仕事は仕事、余暇は余暇と考える人が増えている。アンケート調査の結果などでは、余暇にはテレビを見てごろごろ過ごす、という答えが今でも多く出てくるが、若い世代は自分の体を何等かの形で動かしたいと思っており、実際にそのように過ごしている人も多い。仕事であれ余暇活動であれ、自分の手足を動かして社会参加することを重視する人も増えている。

## (2) 家 庭

人生80年時代の到来は、家庭内の秩序に大きな影響を与えると思われる。家庭の秩序は、世界中のどこでも、2000年来、人は大体60歳位で死ぬことを前提として組み立てられている。直系三世代の同居は予想されているが、

直系四世代の同居は予想されていない。今、日本では、人生80年時代の到来によってこの前提が崩れつつある。「おばあさんの2階建て」になってきているわけである。自らの老いを感じつつある世代、特にその世代の女性にとってもう一つ上の世代の扶養には大きな不安が感じられているのである。また、今後一人暮らしをする高齢者も増えてくると思われるが、一人暮らしには、突然の病、火事、犯罪等様々な危険が伴い、一人暮らし老人の不安も大きい。このような高齢者の家庭の不安を解消するためにも、介護サービス等の充実の他、自動消火システム、ガス漏れ防止のシステムを始めとして、緊急連絡システム等の高齢者の家庭を支援するシステムを作っていく必要がある。

一方、平均寿命が伸び健康な高齢者が増加してくると、高齢になってからの再婚が増加するものと思われる。しかしながら、高齢者の性がタブー視されるとともに、高齢者の再婚は、遺産相続や老後の扶養の問題に影響を与えるため、家庭内の高齢者は子供の反対にあってほとんど再婚できないのが現状である。今後は、高齢者の結婚について、高齢者の生き方の自由を尊重する意味で従来の考え方の見直しが必要となってくるであろう。

その際、遺産相続をめぐる問題をどう解決するかということはとりわけ重要である。「子孫に美田を残さず」という選択をするならば、自らの余命を見越して人生設計をし、遺産を残さないよう社会福祉などのために資産を使っていくことや、研究助成や老人介護などの公共的な活動を行う財団に資産を遺贈するこ

と、あるいは、今後普及していくと思われる終生の財産管理、医療から死後の法要まで含めたあらゆるケアを供給するシステムにすべての資産を預けるなどの方法が考えられる。

しかし、高齢者世代が自分のためにすべての資産を使うとなれば、若者世代の私的扶養や年金負担への意欲を減衰させるという面もある。いずれにせよ、今後増大していく若い世代の経済的負担を考慮しつつ、高齢者の資産をどのように使っていくのが公平かについて、明確なコンセンサスを形成することが課題となる。

### (3) 地 域

地域というのは行政区画ではなく、顔や名前を覚えられる範囲、社会と触れ合う中間の範囲を指す。地域での触れ合いのなかで生きることは、生活の安定感、安心感を高める意味で、老若を問わず重要である。

1960年代に価値観が大きく変容し、青年男女は高齢者たちが持っている色々な旧慣に反発して、地域コミュニティを脱出していき、このため、地域コミュニティが動揺してしまった。ところが、大都会で憂鬱なことが数多くあり、1970年代の後半には、Uターン、Jターン現象が始まった。大都会に住むだけで幸せだという時代が終わり、地方に住むことも幸せにつながる生き方なのだという認識が広がりつつある。

最近では、大都市の大企業の中で出世していくことは、それほど立派なことでもないと考え始めている人達が出てきている。地域社会でのインフォーマルな活動に生きがいを見い

出す若者が増えている。祭りの伝承や教室の開催などで、高齢者の持っている知識・技術を生かすことができれば、地域における世代間の交流にも結びつくであろう。また、手足を動かして具体的な成果の得られる農業を見直し、帰農する人が増えるのではないか。

### ・ 活力ある生

我が国においては、高齢者の絶対数の増加と社会全体に占める比率の上昇が不断に進行することが予測されている。これに伴い、社会の重要な構成要素として厚みを増していく高齢者が、活力をもって生きるか否かということは、社会に大きな影響を与えることとなる。

#### (1) 活力ある社会と高齢者の役割

高齢者の増加による社会の活力の低下を憂う見方があるが、われわれは別の可能性を追求したい。なぜならば、社会に高齢者が増えるということは、様々な価値観や文化を身に付けている人口が増えるということであり、社会文化として成熟の域に向かうことを意味するからである。こうした文化の厚みの増加は、社会の発展のための潜在的活力を増大させるものに他ならない。

このことは、科学的発見や技術革新が伝統文化に根差して生まれて来ることにも示されている。例えば、我が国において、ロボットを作る際に、箸で豆腐がつかめることを目標としたといわれているが、箸と豆腐がなければこうした発想は生まれてこないのである。また、エレクトロニクスの最先端産業において、世界各国で同じマニュアルによって製品

製造を行っても、我が国の女性労働者が最も正確であるが、これは茶道、華道といった文化に裏付けられているからであるという指摘もある。

従来、社会の活力は生産活動を指標として考えられているが、社会の活力は文化を背景としているのである。もちろん、高齢者だけが文化の担い手ではないが、経験や成熟した価値観をもっている高齢者が増えることは、知的集積の増加をもたらすと考えるべきである。ただし、このためには、個々人が生きがいをもって生活することが前提であり、そうした場合に初めて、個々人の活動が自ずと社会の活力となっていくと考えられる。

## (2) 高齢者の積極的な生き方

高齢者層が、このように社会の基盤としての力を発揮していくためには、これまで論じてきたような高齢者を取り巻く環境の整備や社会システムの再構築とともに、個々人が、高齢期においても健康を保ち、意欲を持って生きていくことが必要である。

すべての高齢者が思慮分別のある円熟した高齢者であるわけではない。花咲爺などの昔話が語るように、「良いおじいさん」の対極には「悪いおじいさん」がいる。壮年期において仕事のみを考え、がむしゃらに働いて定年を迎える生活パターンからすると、高齢期には、頑固で自己中心的な、あるいは、目標をもたない無気力な生き方に陥ることもないわけではない。

多く人は、高齢期には次第に仕事と離れて生きなければならず、しかもその期間は従来とは比較にならないほど長くなっているの

であるから、この時期を意欲をもって生きるために、壮年期において、自己を見つめ直すことを怠らず、次の人生への基礎づくりをしていくことが望まれる。長期化する高齢期において、従来の経験を生かし、さらに新しい活動に取り組む等、積極的に生きるためには、壮年期から準備することが望ましいのである。

また、高齢期に入ってからでも、前述したようなインフォーマル活動やグループ活動を通じて常に新たな情報に接するよう努めることが必要である。現在の企業社会を前提とすれば、企業にいたときの人間関係を退職後も生かす意味で、退職者のグループを育てることや、積極的な生き方をしている高齢者を広く世に紹介することなども、活力ある高齢期を生きようとしている人々にとって有意義であろう。

今後は、個々の高齢者が積極的な生き方を考えると同時に、高齢者の知恵と経験を生かす社会システムを開発していくことが極めて重要である。

## 「人生80年型社会懇談会」メンバー

座長	木村尚三郎	東京大学教授
座長代理	石井 威望	東京大学教授
	飯田 経夫	名古屋大学教授
	梅悼 忠夫	国立民族学博物館長
	公文 俊平	東京大学教授
	島田 晴雄	慶応大学教授
	高原須美子	評論家
	堤 清二	西武百貨店会長
	日野原重明	聖路加看護大学長
	藤原 房子	ジャーナリスト
	三浦 朱門	作家